

## 重症視覚障害児の退院後の在宅ケア

(分担研究：新生児・乳児の退院後の在宅ケアシステムに関する研究)

研究協力者：馬場 昭生

共同研究者：市川 琴子・川地 浩子・川路 陽子

**要約**：1986年1月から1989年12月に出生し、名市大またはその他の施設で管理された極小未熟児の中から、癍痕期末熟児網膜症による厚生省分類2度強度以上の重度視覚障害を持つ13名に、アンケート調査を行った。回答が回収できたのは、7名であった。アンケートは、児の具体的な生活状況について保護者に質問する形式をとった。回答で分かったことは、視覚障害があっても健常児と同様に扱いたいという保護者の希望が生活の基礎になっていること、さらに、疾患そのもの、および児の視覚障害の程度について、十分に把握できていないことに対して、保護者の不安が強いことである。後者については、眼科医が対処しなければならない問題である。疾患の十分な説明はもちろんのこと、特に定期検査を徹底化し、児の視覚発達の状況を早期に保護者に知らせることが重要と考える。

**見出し語**：未熟児網膜症, 視覚障害, 定期検査

**研究方法**：対象は1986年1月から1989年12月に出生した極小未熟児で、名市大新生児集中治療室(NICU)、多施設によるROPの研究<sup>1)</sup>に参加した施設、および愛知県ROP研究会<sup>2)</sup>に参加した施設のいずれかに入院して管理された既往を持ち、ROPと診断された後、厚生省分類で癍痕期ROPの2度強度以上となった13名の重度視覚障害児である。実際の児の生活状況を把握するために、児の保護者に対して、表1に示すように4項目からなるアンケート用紙を送付し、回答を求めた。

**結果**：アンケートは、送付した13名中7名か

ら回収され、6名の回答は得られなかった。回答内容を表2にまとめた。

- ① 食事指導：食物は、匂いからそれと判断できるため食事については、特に問題がないとの回答が5例あった。
- ② 遊びとその補助：音の出るおもちゃで遊ぶとの回答が3例あった。また、実際に手に持たせてから名前を教えるとした回答も3例あった。
- ③ 家の中の作り、配置の注意：角のとがった物は置かない、物の位置を変えないとした回答が3例あった。
- ④ 生活指導訓練の経験およびその他の注意点：歩行訓練等を行っている2例以外は、特に生活

指導を受けておらず、また家人も、特にその必要性を感じてはいないようである。さらに保護者の願いは、周囲の人も健常児に対するのと同様に接してほしいということであった。

考察：今回のようなアンケートは、視覚障害児を持つ家庭の問題点や不安内容を、少しでも理解する上で価値あると考える。

回答から分かったことは、健常児と変わりのない様に育てるという基本姿勢と、ROPの経過に対する不安である。後者については眼科医の努力によって少しでも軽減できることであり、親を集めてのROPの勉強会等の必要性を痛感した。また、乳児期から定期的にPreferential Looking方や視覚誘発電位の測定を行なって、残された視覚があるならばその程度を説明してい

かなければならないと考える。

文献：

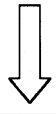
- 1) 永田誠ほか：日眼会誌、92：646－657、1988
- 2) 愛知県未熟児網膜症研究会：臨眼、1991（印刷中）

アンケートの内容

- ① 食事指導はどのように行われていますか？
- ② 何で遊ぶことが多いですか？家の方はどのような補助をしてみえますか？
- ③ 家の中の作り、配置などで、何か注意されていることがありますか？
- ④ 生活指導訓練を、どこかで受けられたことがありますか？その他、注意していることがあれば何でもお書き下さい。

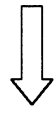
表2 アンケートの回答

症例	年齢	食事指導	遊びの内容・指導	家の中の配置	生活指導訓練	備考
1	1Y3M	・親が与える。 ・指導はしていない。	・直接手に触れさせる。	・特に無い。	・施設で運動訓練。	・運動発達遅延
2	3Y	・特に無い。	・音の出るもので遊ぶ。 ・直接手に触れさせる。	・角のあるものに注意。	・盲学校に通学。	
3	3Y10M	・特に無い。	・特記することは無い。	・特に無い。	・特に無い。	
4	4Y8M	・特に無い。	・大きな物で遊ぶ。 ・細かい遊びは困難。	・特に無い。	・施設で運動訓練。	・運動発達遅延
5	3Y10M	・特に無い。	・特に無い。	・特に無い。	・特に無い。	
6	3Y9M	・食物に触れさせる。	・音の出るもので遊ぶ。	・物の位置を変えない。	・特に無い。	
7	1Y2M	・特に無い。	・音の出るもので遊ぶ。 ・直接手に触れさせる。	・角のある物に注意。	・施設に通園。	



## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:1986年1月から1989年12月に出生し、名市大またはその他の施設で管理された極小未熟児の中から、瘢痕期未熟児網膜症による厚生省分類2度強度以上の重度視覚障害を持つ13名に、アンケート調査を行った。回答が回収できたのは、7名であった。アンケートは、児の具体的な生活状況について保護者に質問する形式をとった。回答で分かったことは、視覚障害があっても健常児と同様に扱いたいという保護者の希望が生活の基礎になっていること、さらに、疾患そのもの、および児の視覚障害の程度について、十分に把握できていないことに対して、保護者の不安が強いことである。後者については、眼科医が対処しなければならない問題である。疾患の十分な説明はもちろんのこと、特に定期検査を徹底化し、児の視覚発達の状況を早期に保護者に知らせることが重要と考える。